



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



卷之三

仁立
卷

六道士人曾錄枝莖

朱旅月鶴山著

明治四月八日
吉田東伍氏寄贈

上杉謙信の家臣歴史

以又囚人のうちりにわが敵余をひそめておこなはるも、こゝの内をへて犯よ
極つてからたるて、つれ思ふ思ふはれど、この意仕方ぬうはあつて
場へ、沙汰ひちあ事のすら轉罪のとくにひきし衣をゆめり、也居斬罪の
料みもる。すまほの正氣也、さへも、沙汰ひちあ人の
生をも重んじるがゆくす無やうにせんえんと、法トスルに
をもく、而り色にて彼囚人を傍より引ひ、首をあらう。犯體をこゝに
のせ、さりきれり法事とるも、參りて侍ふ。似たま家虚言をやうゆ
のま様を、あち者を出でまつて、曲り仰上を御す。以上を御宿す山院侍
くふと血眼よ、やて墨され。檢役の日寄方の山伏法ハ、下寺えりたるをも、
は方の仕をハ、圓寺ニシテ、而と、上方をゆく。一寺寺れあふ圓の尼寺ハ、や
わづく、山院侍と、上方をゆく。モ尼をえの寺法寺奈にゆきまつて、
こりふく、次とす。ほちトせんざるゆくと、寺へりうち、
日捨便よりかねて、沙汰ひちあ事の、塔るれ對り。金ゆすて、口漏
ト官事ト、沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。又法事として、彼法事半
多の作法、とす。お塔をもき寺へり。沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。
正氣の信の人乃、さう為彼法事ト、沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。沙汰ひ
けり。せん日是に塔をもき寺へり。沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。沙汰ひ
因へき。沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。
沙汰ひちあ事の、塔をもき寺へり。

火災にて甚だ甚だ
ぬきりりとれ先風の町より町中の惣をうかりゆ中を防りてき船をば
れてゆる年もうち老夫はやうへ事なへゆえもうちれはゆくらりやまく
人をたぢくとせむれぬとゆてりゆくとあ月下の船舟をすくとみを
はくはく是色まくまくうきぬめうちくみぞりぬねこちしとくつたう
ゆすよしり、れとくらふあくらりやにまくくされよゆくらりやくくゆく
ゆくがゆくのとゆくらりのとゆくらりのとゆくらりのとゆくらりのとゆ
くらりのとゆくらりのとゆくらりのとゆくらりのとゆくらりのとゆくらりのとゆ

132

見るの傳ぢり一切の事無をうて、も實を於る時も、天下用ゆうすむ乃
れ則、凡く物は拂ひ去る時、より拂ふ事も用ゐるに足らず。只、その心を用
へり。か止を用さぬ時は、室をみる。一
向ひを以て、功利乃松、を爲す。松、を拂ふ
策根を引退とりかと。このものの爲ふ事、車を乃井士、岩田七左衛門、松井石をを
氏、つゝ、幼みをくじらへ連判の誓、強を以て義貞の方へり。けひ、かへる事も、
主下の身士、憤死す。かく、まよそも、其別離とあつて、よ一泊、ト、初よも、
ふ、而ちう、義貞も、と、敵の之を、うそを拂ふ。今云ひの改名を給ふる。によりて
矢を、うそを拂ふまづ、うそん御く。はき別、小限、す。承り、車を、おひきら
く、おひきをひる。ト、皆、幕下の、おひきを、おひきも、義
車を、人前、の、おひきを、ひる。ト、由良、舟、西、ト、山が、實、表り、方、まえ、や、あくま
一孔、と、い、こく、君々たすと、す。今、も、義
一孔、取、て、義貞、歸度、を、ねたり。身の一鉢、は利を、も、ち、下の、
に、心、き、を、交、ゆる。に、ひ、め、敵、の、身、食、て、亦、朝、敵、と、の、
心、を、知、る者、と、い、たんや。榮、て、く、活、人、よ、指、を、そ、れん、り、尾、を、軍、つ、
玄、を、あ、て、名、を、あ、強、肉、後、榮、に、活、さん、と、な、る、引、し、と、て、旅、よ、歸、り、
よ、心、を、勤、る、も、中、こ、万、世、忠、臣、乃、謫、す。赤、松、律、師、別、旅、表、よ、い、水
ス、松、る、い、の、活、判、よ、い、く、必、因、の、ゆ、や、う、忠、あり、勇、ゆ、義、小、り、す、一般
多、せ、を、即、ら、の、そ、う、り、戰、陽、キ、乃、謫、す。の、い、し、く、此、老、功、利、を、も、と、
勇、氣、而、公、う、放、す。け、に、倫、す。功、利、乃、ど、り、や、も、れ、を、湯、井、を、り、て、高、た、の、口、實、と、
祖、子、後、せ、を、取、れ、く、上、よ、築、付、思、附、不、湯、井、の、聲、に、あ、ひ、も、築、付、想、す。則、と
あ、下、乃、せ、氏、よ、禍、一、人、を、い、そ、ひ、て、猶、ま、と、な、る、不、れ、築、付、想、す。

をのとひどきをひきうて應をもめり凡事をひどくをほんじて忘れうち先も
記のまへにれて過ぎもあくらみし事を遠へてうつくせよおきおくるれさと
ゆきをはすと巧みりとりひとくらむ事あることひくらゆく毎々試みて知らへ一己にて
をかくをひすして忘れる者らふかくはれあるとひくらゆく事を遠へ
とく動く者らふたまよせばからく、私との巧を容るがために時の運ひ日月
とく行度風雷雨を察する事よりて自若よ動く己ニトキ
はる者らう聖人馬を仙て陰陽送化乃政よ原ひて此心体をもす
朝ひて己ニトキをひす者らう聖人一毫もを假さず用ふ可也一聖人
一言一り皆易小みすとひくら後の聖人を是者、聖人乃言ひを
じて則らずす応接乃ルカとミ財易よ從ひて動てえりす易々送化乃承
はて物よ体一て送ひてきら者ハ吉め海翁ハ愛化応用乃活きたり故よ
ト筆スルをり易曰不恒其德或義之羞孔子曰不占而已矣、君子心よ決セキ
ふとあるせよ成て地よ同のミミ滋の感ハ憶度一てきる所、ひくす
今故ゆくして物のをぬきをよふ神仰ゆきち岩んやとてをの兆めりと云ふ
も此妄心の念をり御の岩よ、わづかす故よ易も少人のよ、達すと云
只天理乃自然子をきりて義比精一きをゑひ坐との私を用ひ工と
りく已てくとせぬきくと勤く者も易を傍らぐて易ひくをふものえき
をかきのをめふとつ
松籟末席よろみてちをすりーりあひて、序を讀みてゆめられ、やまと
をりはけき、終の権門ひり肉よからぬ地のとおもとおね三つ石を、三うのく牛ひぢる
ひ乃愚と、詰棒をつきぢる肉うの處人トヨ日本トヨアシムの者坐て禪を奉す
をはるをさく、俱生部とまふ去難をく、ふねもも多んまの詰付ますては
ますりとひくらて日秋のゆと俱生出されて所取しゆうがをともれすふらむ
ぬは人命教あるとひくらて日秋のゆと俱生出されて所取しゆうがをともれすふらむ
そえん王に角すりふくし傳亦よへを敵を心の御明と名付亦良効とどりふ

学識の尊い儒学者の母自歎曰く「我らの光明を熟むことよりれども私の体
より中庸より其賜さぬて而も威儀にて聞きし事より權するも人の見ゆる所
かくしてこそ家よりかはことよりぬを以て云ちうる松船ふとふも人間の見ゆる所
のうのぬ人乃村よりひづりき施ふるがとくに俱生外の曰いやさみの
乳つらひ一念心を改め時もあまよ法を以てすうる故よ清淨う
過則勿惮改とりあるうへてころうゆうおつれてゆくやく教の心うちもとて
あんまゆくよとてゆく
松船子ち俱生外ふとるひて章をもろく玉城よじアリ内をまうち入り内をうかひ
足れハ十五列を、うり次の弓にまくみたの冥官ある焉く族悉く並居うるあん王怒
きる起りて曰秋十五乃列よとくりとて同冠乃旗を蒙りたゆくの冥官
シテを支配一亡者の善惡を紀一老の善惡を紀一老の善惡を紀一老の善惡を紀
にまく視目ぐん名をりうる眼うらみく善惡のみまく、ゆくべ嗅たるせん於
小ねされ鼻皮まうて嗅をうりかた分の以みもくすりてゆくうるもて
業の秤の計にせ在ひて、まうす是よりて極、示へまきれ老た日く甚う
秋もより即とくめゆかりてかく人を貧て逃げられ面目を失ふのとは冥官
こを役參よたまうるく私の欲負うりて、うるくうりは後多々おゆくより冥
友たると誓、強をきせしゆ徳いとくらうけは後多々おゆくより冥
君の側を所持とくるゆくとす。視月と王の服よからて靈明乃用をたすりく
鼻ハ王乃視を少莫か而を助けく感色の用をあはざえん者えん者、せん者心と身
うらがへ王の心偏倚して是非の眼塞りてゆく視月がんじゆくとくうりて其のと身
見るひと明りゆくは見ゆるを多くて神氣を逐すわうり王の心徳となりて
神明威色の治を、ゆきき、放ふく故よくもくらひまうて其用を尽してくわざ
すくみ、心乃光明智の本體なり王の心は怒、憲、憊、憐、憐して自家の光明をわい
妄想乃泥を以てひみよめり行ふ故よく要ひ、ひも照りを考ふて物をあひて
ことをえぢくの如く故よ業乃秤の計にくまひく空まへん皆善の罪よ、がくす視
月く鼻もくとも天秤とみる心體乃妙用より、なかて佛乃え室後ふもみのま
えん王は既にうくへつみをかの心と役へよす一後象内立たずす一て外の心

卷之三

并をつとむの亦莫考也。初て生むる時もそれより草庵にて、并あらそひね。又真を
乃類みて、とゆきねを浴ゆる所ちとれぬ。是よりのセで、草庵らハ進物を以目く。くる
を記たり。皆考ふ所は、起居すのミ部よ、とゆきねを付ハ志す。も詔のくとを乞。故に
こととく。葬祭のよりハ云々家元は洋。あり。天子七。殿昭穆のよりハ中庸或向。三界
ハ、より御用うる。要服。ハ、たゞして見あふ所ア仙法傳來。」と後也。葬祭のより
立に後り。きりに、と云。くとも能を立す。其時。今聖人を學ぶ者も時の風
俗す。ありて、弑。殺。滅の行を止む。す。かの奉。神。傳來。只我心乃猶を半
供。戒。戒。小風格す。神主ト位牌ト耳ハ、向へて位牌ハ、生へる。わが法。云
まくら。老。母。が。あ。下。先冥の人も、もあれ。廟とい。今日本ニテ大人ノ門たま。と云
リ。ゆう。祀堂。父。の位牌。廟持佛堂の事。今俗人らや。よりて、もうと。を。もと。皆
ほ。て。も。老。母。と。お。若。大。人。と。り。ふ。古。墓。の。上。又。廟。を。て。くる
二。と。う。く。り。ふ。あ。ん。王。まで。う。つ。き。鬼。と。お。う。り。て。婆。妻。ア。セ。モ。リ。す。引。鬼。も。転
し。身。の。ろ。う。所。と。お。う。り。出。る。赤鬼。悟道。
さて。精門を出。て。婆。妻。へ。お。り。ひ。く。途中。を。愚。と。松。箱。火。袂。と。ひ。く。秋。ハ
地獄の奴。うち。施。した。お。心。彼。拂。り。立。き。み。ち。あ。い。奇。施。く。と。り。ふ。去。箱。火。い。ち。く。大。地
界。造化の中。の。な。け。さ。との。い。汝。ハ。陰。の。夷。こ。故。は。自。泉。下。の。る。に。役。す。只。苦。を。島。て。ミ
ソ。お。そ。み。一。御。され。も。蝶。蛾。の。娘。き。小。虫。ま。え。も。と。を。を。遊。る。一。と。立。マ。リ。す。い。ち。ん。や
ハ。う。と。め。た。よ。も。も。と。あ。れ。な。ぬ。の。を。が。お。り。ハ。へ。く。れ。う。く。ぬ。の。を。お。り。ひ。く。て
く。や。じ。へ。う。と。く。ぬ。と。く。を。む。く。て。病。を。因。ひ。く。す。が。や。き。り。と。ち。う。い。み。み。ゆ。
く。れ。改。て。後。日。を。つ。一。ひ。く。病。欲。す。ひ。く。御。り。な。う。れ。欲。も。万。苦。乃。す。せ。り。ん。一。切
乃。ぐ。え。ち。な。と。房。一。神。を。用。一。の。物。と。あ。る。と。ひ。か。を。あ。ゆ。う。く。一。銀。箱。を。お。り。一。次
罷。お。れ。入。敵。を。や。う。内。禍。福。辟。諸。及。ふ。も。の。れ。内。ハ。ま。る。窮。あり。せ。す。あ。や。ま。ち
を。か。き。ひ。少。て。而。を。重。ね。る。と。な。れ。一。迂。往。を。ほ。り。も。と。う。れ。を。い。し。く。
の。し。敵。刀。の。及。も。而。を。ハ。憂。へ。う。す。み。め。而。を。う。れ。ぬ。る。ハ。翁。を。れて。大。般。若
を。勤。え。ん。と。て。え。り。う。苦。ひ。や。と。只。秋。み。す。へ。き。る。り。を。忙。て。な。ま。ず。
う。の。奴。を。相。少。と。と。苦。お。れ。う。の。さ。う。い。れ。の。翁。う。ち。う。り。を。忙。て。大。般。若
を。心。ハ。十。王。の。上。ヨ。立。て。泰。然。と。と。て。和。て。和。て。と。と。後。ら。て。と。と。諒。の。内。ア。死。體。一。只。善。言。を。ゆ。そ。く。心。よ。感。
嘉。を。達。て。お。れ。を。あ。う。と。い。と。と。後。ら。て。と。と。諒。の。内。ア。死。體。一。只。善。言。を。ゆ。そ。く。心。よ。感。

王將軍
之新舊
詩集
卷之二
新舊詩
卷之三